

「県立高校の在り方（報告）」批判検討学習会の報告

群馬県教育委員会は、高校教育改革検討委員会を設けて、昨年3月に審議報告を発表しました。そして12月には「高校教育改革推進計画」が出され、具体化が進められようとしています。当フォーラムでは、去る12月10日（金）、教育会館において上記の学習会をもち、高教組教育政策部長・大貫正雄さんの報告を受けて、質疑応答、討論がおこなわれました。（「高校教育改革推進計画」は群馬県教育委員会のホームページで閲覧することができます）

報告の要旨

< 報告は不合格答案 >

子どもたちに確かな未来を保障するチャンスがない。名指しで統廃合のレッテルを貼るという失礼な新聞発表（2校の校長から意見）。組合無視。

< 書き換えるとしたら？ >

●「県立高校の在り方」の「はじめ」について。

県教委自らの頭で考えるべき。平成8年の尾瀬高校・新田暁高校から四ツ葉学園高校までの失敗と教訓に学んでいない。生徒・父母・県民・現場の教職員の願いに耳を傾けるべき。特に桐女通信制存続運動には学ぶべき。30人学級をはじめとする教育条件整備について一つも提案が無い。

●「少子化による中学校卒業者の減少」について。

統廃合は仕方ないという書き方。他県の取り組みを調べようとしていない。（北海道では12名の学校を存続させる取り組みが行われている）。教育委員会の会議で、長野原、松井田の地域とのかかわり、尾瀬のホームステイ制度を高く評価しているのに、統廃合の対象校にしたのはどういう感覚なのか。少子化＝小規模校統廃合は非常に地域を破壊する負の連

鎖になる。

●「Ⅲ 県立高校の再編整備 1. 適正規模」について。

なぜ正直に財政問題だと言い切らないのか。国・県の財政事情を優先させ、小規模校は廃止しますと。（利根・沼田の校長会では、尾瀬高校がなくなれば地域の若い人が育たず地域自体がだめになる、財政的な切り口だけで廃止しないでくれという訴えがあった）。まず‘統廃合ありき’という基本構想を捨てて、‘存続ありき’に書き直すべき。今回の統廃合計画は高校入試の全県一学区によってあぶりだしておいて、あなたの学校はもう一歩元気が無いですねと責任を押し付けている。

●「Ⅲ 県立高校の再編整備 2 適正配置」について。

答案は少し表現が弱い（統廃合については減らすというのを前面に出している）が、定時制統廃合の危険性がある。定時制の現状を見据えて、夜間定時制の20人学級を早期に実現すべき。

< 今後の運動の進め方 >

今回の案の出方を見ていると、答案を書いている人たちが一番気にしているのは、高校教育改革ではなく、上意下達、国体の護持ではないか。困難は貧しい人に押し付けられればよい、小規模校に押し付けられればよいという流れ。

それにどう対処してゆくのか。長野高教組が考え出した原則1～8も参考にしたい。沼高・沼女がどうして先なのか、統合のための共学は納得しがたい（前高・前女が共学にしたあとならわかるが）。財政的な切り口だけでは話にならない。

討 論（質疑も含め）

「県民のなかにも県の教育委員会がきめることだからとやかく言ってもとというのがある。」
「統廃合は子どもが少なくなっているのだから仕方ないという市民が持つ疑問にどう答えたらよいか。」という意見をめぐって。

大貫さんから、親は社会に出て平凡でもよいから自立して生きて欲しいと願っているが、ある進学校卒の娘は医学部を目指し2浪している。恥ずかしいから成人式も行かないと言っている。どうしてこんな風になったのか、と言う話が紹介された。こうした例が他の進学校経験者からも出された。教育政策に物申すことは難しい状況だが、子どもを持つ親は様々な悩みを抱えている。（ここには協力・共同をひろげる可能性が秘められている）。また、我々が主権者意識をもつことが重要との意見も。

統廃合をめぐっては、最初に減らすのは前高・前女ではないかと正面きって言える闘いを、学校現場全体にある‘ピラミッドみたいなもの’、‘受験戦士づくり’を変えなければという意見が。また、「在り方」の適正規模が出てくる3から以降は、効率の論理、マスプロダクションの論理。財政的要請なら、松井田・孺恋・長野原などを分校化し、ネットワークだとか技術を使って教師が教えやすい状況をつくり、生徒も行き易い状況をつくれれば金もかからない。校長もいらぬ。

「伊工のデザイン科はなぜつぶされたのか、施設設備などの予算配分はどうなっているのか。」をめぐって。

校長が意見書を出し、デザイン科の教師、生徒も反対し、運動も盛り上がったのに、無理につぶし波及効果をねらったか？不可解。興陽高校の生活科学科も1クラスにし競争を煽った。予算配分も有力校重視の差別的予算。公教育の在り方に反する。

「在り方」の共学問題だけは、県民の意見を理由にして共学を遅らせているという指摘をめぐって。

この問題は、色々な人がかかわり易いので運動の切り口になるのでは、と言う意見が。さらに切り口として、入試制度の改善も出された。（埼玉県では2012年に1回受験にするという話も）。

今後の運動の進め方としては、具体的な提案を県にあげてゆく、現場の教師は目の前にいる生徒のことを具体的に示しながら改革の方向を提案してゆく、市民運動、ネットワークのような組織を広げることが重要。共学も一緒に学ぶのが当たり前という方向で進める、などが出された。大貫さんの報告に学びつつ、意見交流・討論をおこない、一定の展望を開くことができた。（文責：平井 敏久）

